

## 新連載：オーストラリア便り vol.1

## 「水の正義」について

永田健雄（市民科学研究室会員）

オーストラリア国立大学（ANU）大学院サイエンスコミュニケーション専攻に留学して 4 ヶ月が過ぎた。ANU では科学政治や科学対話などを学び、来年度より研究プロジェクトを始める予定だ。ところで入学して間もない 7 月下旬頃、オーストラリア全土では Science Week（科学週間）があり、ANU のあるキャンベラ市でも休日を中心に様々なイベントが開かれた。その中に、今般話題となっている「気候正義」とも関わりうる内容の講演を聴いたのでそれを紹介したい。講演題目は「Water: Building Solutions from Indigenous Knowledge & Science」、直訳すれば「水：先住民族の知恵及び科学を通して解決策を築く」といったところか。講演者は 3 名おり、いずれも ANU の教員であった。1 人目(Prof. Quentin Grafton, 以下 Quentin 教授) は経済学の教授で、2 人目 (Dr Matthew Colloff, 以下 Colloff さん) および 3 人目(Dr Virginia Marshall, 以下 Marshall さん) は生物分類学が専門の教員であった。参加者は 30 人あまりで、年代は高めだったと思う。ANU の学生は参加者の 3 分の 1 ほどだった。Grafton 教授は導入的な役割を果たした。主に国際的な観点から水資源へのアクセスに係る著しい不平等を語り、持続可能な開発目標（SDGs）の 6 番目「全ての人にとって利用可能かつ持続可能な管理が行き届いた水と衛生設備を確保する」<sup>(1)</sup>や先住民族の権利に関する国連宣言第 26 条\*を引用しながら、次第に「**Water Justice**（水の正義）」といった語句を頻繁に使用していった。水+正義という言葉遣いは日本では聴き慣れないように思える。少なくとも不勉強な私はそうだ。教授によれば、水の正義とは下記の 4 項からなるという。

1. **Fair and just distributions**（公正な分配）
2. **Recognition of non-market values**（市場価値とは異なる価値観の認知）
3. **Participation of all stakeholders in decision making**（意思決定に全ての利害関係者が参加すること）
4. **Long-term sustainability**（長期的な持続可能性）

1 番目は、水資源に関わる全ての人々が、生活していけるだけの水を確保できること。2 番目は 1 番目の「生活していける」が衛生面のみならず文化的、宗教的な意義なども踏まえたものであるべきことと、金銭的なコスト/ベネフィットだけで水の分配を行なうと正義が損なわれること。3 番目は、社会的、経済的背景に関わらずその水資源に関わる全ての人々が、どのように水を分配するかについて発言権を持つべきであること。4 番目は、当該の水資源を枯渇させることなく長期的に利用し続けられるようしっかり管理すること。これらをそれぞれ表している。

\*備考：先住民族の権利に関する国連宣言第 26 条<sup>(2)</sup>

1. 先住民族は、自らが伝統的に所有してきた、占有してきた、ないし利用し獲得してきた土地、領域及び資源に関する権利を有する。
2. 先住民族は、伝統的な所有や占有、利用、その他種々の形態に則り継承してきた土地、領域及び資源に関してそれを保有、利用、開発、管理する権利を有する
3. 国家は、先住民族に係る土地、領域及び資源を法的に認知しなければならない。そのような認知は、対象となる先住民族の風習、伝統、土地保有制度に順って実行されるべきである。



図 1. マレー・ダーリング盆地(図中クリーム色部分)の地図<sup>(3)</sup>。  
首都キャンベラ市も含まれていることが分かる。国内の農業生産高の 4 割ほどと、人口の約 1 割(200 万人あまり)をカバーしている。渇水で特に苦しむ集落は盆地北部に多い。

もマレー・ダーリング盆地にあるが、その水量は渇水や灌漑との絡みで近年非常に少なくなってしまった<sup>(4)(5)</sup>。Woytchugga 湖が先住民族から月の湖と呼ばれるのは、季節に合わせて月のように満ち欠けする湖だからという。彼らにとって貴重な漁場、狩場であり、文化的に重要な場所だったという。先住民族の芸術を通して彼らの感情が語られ、観るものはそこを起点として立場の違いを超え、寛容や包摂が生まれ、連帯の輪が広がっていくという。

また、Colloff さんは歴史的な文脈を持ち出し、「水を非植民地化させる」という話につなげていった。これについては講演後の質問で改めて話があったが、オーストラリア大陸の植民地化が

続いて Colloff さんから話題の中心はオーストラリアにおける事情、特にオーストラリア東部に位置するマレー・ダーリング盆地における長年の渇水問題へと移った。特に、2017 年 1 月から始まったと言われるものは過去最も深刻な渇水といわれ、水が全く手に入らない集落が 15 以上あるとのことだ。そしてその多くが先住民族の集落でもあるのだ。老齢な教員だったが、その語りには非常に情熱があった。水資源の管理は民営化され、綿産業などのための灌漑事業に 40 億豪ドル(およそ 3000 億円, 2019 年 12 月 1 日現在)もの血税が使われ、企業利益と引き換えに多くの先住民が渇水に苦しんだことを訴える語りには熱があった。

続いて、芸術を通じた対話という意外な切り口で問題への関心を誘う。Thangkaali 族の言葉で「月」を意味する Woytchugga 湖や、Darling 川を題材とした絵を見せる。いずれ

先住民族から土地や水を奪っていった過程とすれば、先住民族と入植者の間で改めて和解し、誰もが文化的・精神的に幸福な最低限度の水にありつけるようにしていく過程とのことだ。これは水の正義にそのまま通じるだろう。その第一歩として先住民族、入植者の垣根を超えた対話を始めることの重要性を強調し、対話の触媒として芸術作品を例示したのである。ここで、先住民族の文化的・精神的な幸福における水利用の重要性についてだが、思えばこれはオーストラリアの先住民族に限った話ではない。日本でも水はコミュニティの連帯に文化的・宗教的において重要な役割を果たしてきた。各地には水に縁のある神社や祠があり、神話や伝説では水神と人との関わりが多く描かれている。大阪の天神祭や愛知の津島天王祭のように、水を使ったお祭り・儀式は各地にある。上水道普及前は多くの家に井戸があり、井戸端会議という言葉があるように水場はコミュニケーションの場でもあった。文化の隅々に水が関係してきたことが感じられる。私たちが生活や文化の拠り所としてきた水場が、突如知らない人たちに奪われたらどう感じるかと思えば、この概念の必要性も感じられるだろう。

Marshall さんは Colloff さんの話をさらに進める。アボリジニの水権利が法的に認知されるべきことを強調しつつ、アボリジニの知恵もまた土地政策に生かされるべきであると述べた。

アボリジニは、独自のカレンダーに基づいて土の品質を管理し、山火事に対処してきたという。その結果としてオーストラリアでは古来炭素分に富み、干ばつに強い土が出来上がっていたという。しかし、それはヨーロッパ式の河川管理、水上交通のための河川整備や灌漑などによって台無しになってしまったという。そこで、干ばつが続く現代においてアボリジニが持つ土地勘や水の「勘」は、オーストラリアの政策に盛り込まれるべきだという。

全ての講演者の話を 1 時間ほどで聞き終わってから質問タイムとなった。そこで講演者が話したことを含め、全体を通して思ったことを述べる。特筆すべきは、全体を通して入植者による加害を認め、それによって土地や人が受けてきた傷を先住民族、入植者双方が対話しながら癒していくという文脈で語られていたことである。個人的意見だが、この講演を聴いた 1 週間後に「表現の不自由展」が話題になった時に、一部の反応とのコントラストを感じさせるものだったとだけ述べたい。また、質問タイムでは自分が留学している大学教員が、社会運動を行う権利が保障されるべきとして語った部分は、市民の積極参加に興味のある者としては元気付けられるものだった。具体的には以下のような回答があった。「民族を超えた対話を促し (Conversation)、積極行動が権利として保障され (Activism)、報道の自由が守られ (Freedom of Press)、団結すること (Collectivism) が、全てのひとにとっての水の正義を達成する上で必要。水循環システムを変更し、全ての人にとってやさしいシステムに変えていくためには、金銭以外の価値観 (生存・文化・宗教など) を含めて、かつ全ての利害関係者が参加した上での議論が必要。そして、民族の壁を超えた対話、団結すること、活動、全国的な報道の力を借りる。これらによってすこしずつ社会正義を実装していけるはずだ。」(Grafton 教授, 講演後の質問への応答, 引用者抄訳) という主張だ。活動や報道の自由については、陽の当たらないところで発信力の無い人たちが苦しんでいるという状況では特に重要だと感じる。これは先住民や、水問題に限ったことではないだろう。

また、イベント会場が政府所管の研究機関（オーストラリア連邦科学産業研究機構）にもかかわらず、「少数の利益のために州の予算を 40 億ドルも使って灌漑インフラを作り、15 もの集落で水にアクセスできない人たちを生むのははっきり言って違法」（Colloff さん、講演後の質問への応答、引用者抄訳）と断言できるのがすごいと思った。

イベントを通してだが、予想と違う内容がありつつも「権力に人権を守らせる活動」に興味がある自分としては非常に満足いく講演だった。他の参加者の反応を見るに、多くの方も満足していたと思う。生存のために一人一人が充分かつ安全な水にアクセスする権利を持っている、という考えは以前からあったが、コミュニティの依拠する文化的活動を持続するための水が確保されるべきという考えが新鮮だった。ついでだが、この講演がきっかけでキャンベラ市の水資源についても気になり、色々調べるようになった。

改めて述べるが、移入者が、先住民族が何千年もの間維持してきた土地や水資源を彼らから引き剥がし、今の姿（そもそも干ばつや森林火災が起こりやすい状況）に変えてしまったのだ、という事実—必ずしも自分自身が犯してきたわけではないが、自分たちが誇りに思う国の歴史において、そのようなことがあったという事実—と向き合うという意識は、自分たちの社会を今後より暮らしやすい処にしていくなかで重要だと思う。この歴史の中で犯されてきた誤ちと向き合う態度は日本に住んでいる者にとっても参考になるだろう。オーストラリアではヨーロッパ式の農業手法への変革や、企業利益を追求した大規模な灌漑によって水資源が枯渇し、アボリジニをはじめとした住民生活が脅かされた。日本においても、各種の公害問題や、福島第一原子力発電所における事故の影響など、安易に利便性を追求した結果住民生活が脅かされてきた例が確かにある。加害行為の反省を踏まえた上であらゆる関係者間の対話が始まるところから、社会全体としてこういった問題を乗り越えて前進していけるのではないだろうか。

近年、欧州の若者を中心として「Climate Justice」（気候正義）が叫ばれ、今年その運動は急拡大を見せている。私が住んでいるキャンベラ市でも、週ベースで気候正義を求めるデモが行われている。特に、9 月 20 日には Thunberg さんに触発され、学生を中心に 1 万 5 千人が街中で行進した<sup>(6)</sup>。オーストラリアでは、グレート・バリア・リーフなどのサンゴ礁の急減や広がる山火事をよそに政府は新たな石炭開発計画を進めており、リアルでもネットでも気候危機に耳を貸さない対応への苛立ちが強く見られる。

気候変動の影響を皆さんは感じられるだろうか。気候変動への対処を今すぐ行うべきだと皆さんは思われているだろうか。気候変動に対処するためには社会構造を根本的に変えなければいけないと皆さんは思われているだろうか。私個人としては、その全てに「Yes」と答えたい。しかしながら、気候変動はオゾンホール問題などと異なり、「悪役」が沢山いる。変化も非常に緩慢なものだ。実際に様々な問題の根底に気候変動があっても、その影響は複雑である。これらの「分かりにくさ」を一つ一つ打破していく役割が、今のサイエンスコミュニケーションにはあるのではないかと思う。サイエンスコミュニケーターには、気候変動にはこういった要因があり、いかようなインパクトを私たち一人一人の日常生活に及ぼしているかを分かりやすく説明するのももちろんのこと、双方向的なコミュニケーションを確立しなければならないだろう。また、サイエ

ンスコミュニケーターは気候変動に対応した行動指針の提示や、行政への訴えかけを通して企業や国民の行動変化に繋げる、といったことが可能な存在でもあるだろう。そういう意味で、気候ストライキを通して行政に気候危機を訴えるというのは一つのやり方だと思う。その最先鋭の一つ、「Extinction Rebellion」（絶滅への反逆）はホームページで行政に訴えかける内容や、手続きを事細かに説明している<sup>(7)</sup>。

サンゴ礁消滅、渇水、山火事で苦しむオーストラリア。豪雨や豪雪に苦しめられる日本。西日本豪雨や、2019 年台風 19 号などの被害では、被害後のインフラが復旧までにかかなり時間を要した。気候変動によって人々の生活は明らかに被害を受けている……。

一方、外から見ているだけだが、日本でも気候正義を求める機運がようやく高まってきたと感じる<sup>(8)(9)</sup>。

最後に話は変わってしまうが、渡航してからの経験を踏まえてると、総じて民族間の対立を乗り越えるための議論が日本より遥かに進んでいるように感じた。日本が本質的に劣っているということは断じてないと思う。社会通念や教育内容の違いもあるだろうが、オーストラリアの言論空間の多くが属する英語圏が、その多様な背景を武器にして様々な議論を進めてこられたように思う。それは、差別に関しても、気候に関してもそのように感じる。一方、政治の階層での不均等な扱いや、一般市民の他文化への無理解は日本と同じように存在すると思った。何度も書いてしまったが、歴史と向き合い、交流を絶やさないことの重要性を感じさせられる。



図 2. キャンベラ市中心部の交差点で見かけた 11 月 29 日気候正義デモのポスター。キャンベラ市では大学や街中の至る所で「絶滅への反逆」などの気候正義を求めるポスターを目にする。



図 3. 山火事の影響で霞んだ ANU の上空。11 月 22 日午後 4 時過ぎ (AEDT) の写真。

## 参考文献

- (1) Sustainable Development Goal 6, United Nations (<https://sustainabledevelopment.un.org/sdg6>) 最終アクセス: 2019 年 12 月 1 日, 訳は引用者による.
- (2) United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples, United Nations ([https://www.un.org/esa/socdev/unpfii/documents/DRIPS\\_en.pdf](https://www.un.org/esa/socdev/unpfii/documents/DRIPS_en.pdf)) 最終アクセス: 2019 年 11 月 28 日, 訳は引用者による
- (3) Murray-Darling Basin Authority, Discover Murray River (<http://www.murrayriver.com.au/river-management/murray-darling-basin-commission/#basinmap>) 最終アクセス: 2019 年 9 月 28 日
- (4) The Darling River is simply not supposed to dry out, even in drought, the Conversation, 2019 年 1 月 16 日 6:13 AEDT (<https://theconversation.com/the-darling-river-is-simply-not-supposed-to-dry-out-even-in-drought-109880>) 最終アクセス: 2019 年 12 月 1 日
- (5) Life returns to Lake Woytchugga after 10 years, the Daily Telegraph, 2011 年 8 月 16 日 0:00 AEST (<https://www.dailytelegraph.com.au/news/nsw/life-returns-to-lake-woytchugga-after-10-years/news-story/1736b3c408f7a70974fac953a2a9cc20?sv=c72b541c471b114da25607d7ebae433a>) 最終アクセス: 2019 年 12 月 1 日
- (6) Global Climate Strike in Canberra: 15,000 join student march, the Canberra Times, 2019 年 9 月 20 日 12:36 AEST (<https://www.canberratimes.com.au/story/6397258/thousands-pack-canberra-streets-to-demand-climate-action/>) 最終アクセス: 2019 年 12 月 1 日
- (7) Our Demands, Extinction Rebellion (<https://rebellion.earth/the-truth/demands/>) 最終アクセス: 2019 年 12 月 1 日
- (8) グレタさんに続け! 熊本でも一斉行動 温暖化対策訴えマーチ 中心商店街「非常事態宣言」市に要望, 熊本日日新聞, 2019 年 12 月 1 日 10:41 JST(<https://this.kiji.is/573694817505920097?c=39546741839462401>) 最終アクセス: 2019 年 12 月 1 日
- (9) 福岡) グレタさんに続け 気候危機訴え、若者らマーチ, 朝日新聞デジタル, 2019 年 11 月 30 日 3:00 JST (<https://www.asahi.com/articles/ASMICY4J65MCYTIPE01C.html>) 最終アクセス: 2019 年 12 月 1 日